

まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (13)

## 鹿島神宮と鹿島地方に行く



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って  
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (13)  
鹿島神宮と鹿島地方に行く

木村 進

ふるさと“風”の会

## (1) 鹿島神宮-一の鳥居と東一の鳥居

鹿島神宮は常陸国一の宮でもあり、伊勢神宮・香取神宮と並んで昔からの特別な名前で呼ばれる「神宮」です。

今では明治神宮など数は多くなりましたが、神宮は 3 社しかなかった時代が長く続いていました。

また「鹿島発ち」などと昔の防人たちが出立の時にここを御参りして旅だった記念すべき場所です。

でも、その後の太平洋戦争などでも戦地に赴く時に同じような言葉が使われていますので複雑な思いもします。

まあ、ここは私が紹介するまでもないでしょうから、私としては少し違った見方が出来ないものかと思いながら眺めていきたいと思います。

まず初めに神宮の入口鳥居とは離れた霞ヶ浦（北浦）に作られた「一の鳥居」を紹介します。

常陸国風土記などを見ると昔国府（石岡）に来たお役人は高浜から船でこの鹿島神宮に詣でます。

そのため、船の到着場所の近くに鳥居が建てられました。

またもう一つ鹿島神宮の東北にある明石浜に「東一の鳥居」もあります。これらが何時頃建てられたのかははっきりしません。

巖島神社と同じように水の中に建っていた時期もありまた陸に建てられた時期もあるようです。しかし私が知っている頃にはこの一の鳥居は陸上に建て変えられていました。平成 26 年の鹿島神宮式年遷宮（12 年毎）に合わせて、また昔のように水上に建てられる計画が進められ、陸上の一の鳥居も老朽化が進み危険だと言うので取り外され平成 25 年に立派な赤い鳥居が水の中にしっかりと建てられました。



湖上の鳥居は 30 年ぶりの復活だと言います。(2013 年訪問)

これは 2013 年 6 月 1 日に完成して、式典「鏑矢 (かぶらや) を放つ「墓目 (ひきめ) の儀」など」が行われたそうです。

水底からの高さは約 18.1m、幅は 22m で、広島県宮島の厳島神社 (高さ 16m) の鳥居をしのぐ国内最大級となる鳥居です。

2014 年 9 月に 12 年ごとの式年大祭「御船 (おふな) 祭」に合わせた前年の完成です。

この鳥居の設置されている場所は潮来から国道 51 号線で北浦に架かる神宮橋 (旧道側) を渡ったすぐ右側にあります。

橋の上からこの朱色の鳥居が目飛び込んできます。

この鳥居から神宮入口までは約 2km 離れています。

香取神宮にも水側に鳥居がありました。やはり香取と鹿島はこの昔の流れ海 (霞ヶ浦) の水上交通に両サイドをしっかりと守っているようです。



一の鳥居を少し北上した所に「大船津稲荷神社」があります。この地区は大船津といいますので、昔から船の出入りが多かったようです。お稲荷さんが何時頃建てられたのかが良くわかりませんでした。鹿島神宮とは別に、庶民の信仰として広まっていたものでしょう。

鹿島神宮の御船祭は 12 年に一度行われる水上祭です。これが午（うま）年の平成 26 年 9 月 1 日～3 日に行われました。鹿島・香取は馬に縁があるようです。鹿島神宮の「武甕槌(たけみかずち)」と、香取神宮の「経津主(ふつぬし)」のそれぞれの武神が水上で再会するという祭です。鹿島神宮から出御した神輿を 2 日目の朝 9 時頃に一の鳥居のある大船津で船に乗せ、全部で 50 隻以上の船が、平安絵巻さながらに行列を組んで進んでいきます。そして水郷地帯の加藤洲で経津主と合い、再び鹿島神宮に戻ります。さて、香取神宮の方の式年大祭は神幸祭といい、同じ年の平

成 26 年 4 月 15・16 日に行われました。

同時に行うのかと思いましたが違っていました。でも対になった神社の例大祭が春と秋にわかれているのはよくある話ですので気にはなりません。この 2 つの神社 (神宮) の位置関係をもう一度チェックしてみましょう。この神社が作られた頃を想像して水面を 4m 程上昇させた地図で考えてみます。



赤丸の位置が鹿島と香取の両神宮の一の鳥居の位置です。

出雲大社は 60 年に 1 度の遷宮、伊勢神宮は 20 年に 1 度の遷宮で神社の本殿を取り替えたり、修理したりしてきました。

ここ鹿島神宮と香取神宮も元々は 20 年に 1 度の遷宮、本殿の修理などを行っていたそうです。しかし、これも戦国時代になり続けることができずに一時中止され、その後復活されたときに 12 年に 1 度となったといわれています。

この鹿島神宮と香取神宮は日本の国譲りでは重要な役目を担っています。両方ともこの東国を平定した大和朝廷の武人を祀っています。そのため、現在でも剣道などの武術をする人たちのよりどころとされ、子供たちの参拝も絶えません。ではこれら 2 人の武神はどんな人物だったのでしょうか。そしてどんなことがあったのでしょうか？

上の地図を眺めながら勝手な想像をしてみましょう。

この現在の霞ヶ浦は大昔には大きな内海で流れ海とか香取の海とか呼ばれていました。そこには静かな海が広がり人びとは貝や魚を採り、山の木の実や獣をとって 1 万年以上にも亘って仲良く暮らしていました。

これらの人びとは縄文人と呼ばれていますが、肌には入れ墨をし、洞窟のような穴の中で生活するものが多かったようです。狩りも得意で男性たちも勇猛だったのでしょうか。そこに南からの黒潮と北からの親潮に乗って二つの流れがぶつかるこの場所に、船を操るのがうまい人びとがやってきました。そしてそれまでにいた人々と住み分けしながら暮らしていたのかもしれない。そして後からやってきた人びとも、魚の豊富なこの地で漁をし、稲作の技術や麻や絹などの作り方も知っていたとも考えられます。そして少しずつ集団も出来てきました。

そして、現在の霞ヶ浦の南側（利根川の南）には「兔上国（うみのうえこく）」という小国ができました。

一方九州から東進してきた民族は今の奈良県に定住の地を確保し、日本の統一に乗り出します。東国制定にやってきた武人はやはり九州の多氏族「建借間（タケカシマ）命」です。

常陸国風土記ではまず賊を退治しようとやってきた場所は「安婆（アバ）島」でここから東の対岸で立ち上る煙が敵か味方かを占っています。

ここにはこの海の安全をつかさどる神を祀った大杉神社があります。

そして、この安婆嶋の先端から見える対岸は「潮来」の地です。

ここから建借間の軍団は船で潮来に渡ります。

しかし、言うことを聞かせようと武力で現地人を捕まえようとしますが、現地人はすみかである洞穴などに逃げ込んで出てきません。

そこで策を考え、浜辺で楽しそうな祭りを行って、現住民を浜辺に誘い出し皆殺しにしてみました。

そしてしばらくは北浦の西岸の大生の地（大生神社）で体制を整え、西の行方方面に進出しますが、そこにはまだたくさんの敵がいたのでそこを後から攻めることにして、海岸近くを制圧してそのまま北浦を北上し、水戸から那珂川をさかのぼってここを勢力下に治めます。

その功績を認められ、都からは仲国を治める「仲国造」として任命されました。そしてそのシンボルとして建立されたのが多氏の祭神「武甕槌」を祀る鹿島神宮であると……。

その後制圧していった場所には信仰の対象として鹿島神社が建てられていきます。

香取神宮の祭神は経津主神（ふつぬしのかみ）「常陸国風土記では普都の大神」だが、こちらも兔上国にやってきて千葉から常陸国の信太郡まで進行してきます。そして常陸国風土記では信太の地で役目を終わり、着ていた鎧や兜を脱いで天に登っていきます。

こちらの民族はどうやら物部氏の氏族と思われ、初期は大きな力をもっていたが、途中から陰に隠れてしまい、表舞台から姿を消してしまいます。そして、日本の歴史の中では鹿島の武甕槌（たけみかづち）に従うような神と姿が変わってしまったようです。

この地域には鹿島神社と並んで香取神社もたくさんあります。

でも香取神社はもっと昔には多くあったのではないかと思っています。